

近代日本におけるモスリン

Muslin in Modern Japan

先川 直子

(Naoko SAKIKAWA)

I. はじめに

わが国の近代といわれる時代のことを見ていくと、明治維新以降、わが国が諸外国に対して広く門戸を開き、その交流が活発になるにつれて、各方面において、それまでに見たこともないような品々が数多く外国から渡来してきた。染織品についても、その例外だったわけではない。つまり、日本の染織技術が、その根底を揺さぶられるほどに強く、外来のものの影響を受けた時期は、一般に三期に分けられるが、この時期こそは、その第三期目に当たるのであり、ヨーロッパからの、機械文明とともにもたらされた、機械織機や化学染料の流入期であったのである¹⁾。そして、これらの進んだ技術を用いて生産された目新しい染織品もまた、数多くもたらされたのである。

そのような第三期に属する染織品の中には、もともとはヨーロッパ生まれの、洋装用の品でありながら、洋装文化の圏外であったわが国に入ってきて、本来のものとはまったく異なった独自の発達をし、その後、明治の末期から大正期を経て、第2次世界大戦の起こった昭和10年代までの時期において、日常着用の和装素材として、一般の人々の間に広く普及した毛織物がいくつかある²⁾。その代表的なものがモスリンであるが、セルジスやフランネル、ラシャ等の他の外来の毛織物と異なり、わが国におけるモスリンは、ヨーロッパにおける本来のモスリンとは原料自体も大きく異なっている染織品であった。

そこで、本論文においては、まず初めにモスリンとは何か、ヨーロッパのモスリンとわが国のモスリンとは、どのように異なるのかを明らかにし、次に、公的な統計資料を用いて、モスリンの輸入量や生産量がどのように変化していったかを統計的に調べることにより、供給量の推移を数量的に正確に把握したいと考えている。続いて、新聞・雑誌を継続的に調べることにより、消費者側の動向を明らかにし、さらに、文学作品等の中で、モスリンがどのような衣服として扱われ、表現されているのかを調べることによって、モスリンの用途や人々がモスリンをどのような染織品と意識していたのかを探りたい。

すなわち、本論文は、モスリンに対して、服飾史的なアプローチと数理的なアプローチとの双方を試みることによって、その全容を明らかにすることを目指すものである。

資料としては、モスリンの流通量の変化について、輸入量は内閣統計院が明治15年に発行した『第一回日本帝國統計年鑑』以降の毎年の『日本帝國統計年鑑』によって、国内生産量については明治32年以降の農商務省発行の『農商務統計表』にモスリンの生産量が掲載されている

ので、これにより把握した。次に、モスリンの動向については『風俗画報』の創刊号（明治22年2月10日）から最終号（大正5年1月5日）までの記事と挿絵・口絵および表紙絵、『東京朝日新聞』の明治20年代以降の記事と掲載広告を主な資料として調べ、文学作品中の衣服描写については『明治文学全集』全99巻（筑摩書房）を用いた。また、『モスリンと其取引』（大正15年）、『近代友禅史』（昭和2年）、『西陣史』（昭和7年）等の生産地における資料などを補足資料として用いた。

II. モスリンとは

本来は西アジアのメソポタミアの都市モスール（Mosul）で織られていた上質の細い綿糸を用いた軽く目の粗い平織の綿織物であり、それをアラビア人がモセレニ（mosselini）と名付けて輸出し、ヨーロッパでモスリン（英：muslin、仏：mousseline）と称されたという³⁾。これには、東インドのモスール（Mosul）地方より由来した名称だとする説もある⁴⁾が、いずれにしても、この織物は、平織の薄地綿織物だったのである。インドのダッカモスリンでは十数メートルの長さの裂の重さが200g以下だったともいわれている。神戸ファッション美術館で2010年1月から3月にかけて開催された「モスリンと毛斯綸—変貌する渡来布の物語—」展において展示されていた「ダッカの霧」と名付けられた、透けるように薄い平織の木綿の織物は、この複製品と言えよう⁵⁾。

その後、産業革命後のイギリスにおいて、原料である綿花のインドからの豊富な供給と動力織機の発明との相乗効果により、機械織の薄地の綿織物であるモスリンが大量に生産されるようになり、18世紀末から19世紀初頭にかけて、図1のようなハイウエストでほっそりしたシルエットのシュミーズドレスの素材としてヨーロッパで大流行した。しかし、この薄地綿織物のモスリンのドレスではヨーロッパの冬の寒さにはまったく対応できず、冬には肺炎による死者を多数出したために、肺炎はこの時期にはモスリン病とも称されたのである⁶⁾。

そして、19世紀後半になると、ヨーロッパでは羊毛を原料にして同様の薄地の織物であるモスリンが生産されるようになってくるのである。つまり、イギリスのウーステッド・モスリン（worsted muslin）やフランスのモスリン・ド・レーン（mousseline de laine）がこれである。しかし、毛織物のモスリンは綿織物のモスリンほどのブームを起すには至らなかったために、ヨーロッパにおいては、今日でもモスリンと言えば薄地で平織の綿織物を指しているのである。



図1 *La Belle Assemblée*
1815年10月号掲載 ファッションプレート

一方、わが国には明治時代に前述の毛織物のモスリンが入ってきたため、輸入当初からモスリンと言えば、綿織物ではなくて、一般には細い梳毛の単糸を用いて薄地に織り上げた平織の梳毛織物を指しているのであり、さらには平織ではなく2/2の綾に織った綾モスリンなども存在している。そして、同様の綿織物の場合には綿モス・新モス・瓦斯モスなどと呼んで区別しているのである。

次に、モスリンのわが国における呼び名について考証すると、モスリンはモス・メリンス・縮緬呉呂・唐縮緬などとも呼ばれていた(図2・図3)。メリンスは原料である豪州のメリノー種の羊毛を用いた毛織物という意味で用いられたものであり、唐縮緬については外来の染織品という意味で付けられた唐の文字とともに、絹織物である縮緬の代用品として、縮緬と同様の用途に用いられたために、この名称で呼ばれたと言われている。実際、図3の呉服店「伊勢太」の新聞広告においても「唐ちりめん」と「本ちりめん」が併記されており、価格は唐縮緬が10銭より売られているのに対して、本縮緬すなわち絹織物の縮緬は35銭以上となっており、唐縮緬は縮緬の1/3から1/4程度の価格で売り出されているのである。

また、マイクロフィルムにより明治20年代と30年代の『東京朝日新聞』を調べて範囲では、越後屋・白木屋・伊勢丹といったように後に百貨店となる大手の呉服店は、頻繁に売り出し広告を出しているが、唐縮緬やメリンス、モスリンといった文字は見出せなかった。このことは、



図2 『東京朝日新聞』掲載広告
明治28年9月18日

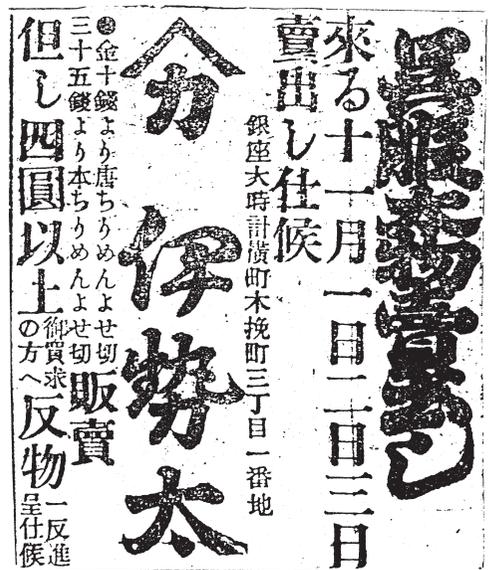


図3 『東京朝日新聞』掲載広告
明治26年10月29日

モスリンが高級品を扱う老舗の呉服店では大々的に宣伝するのをはばかりな庶民的な染織品だったということではないだろうか。

一方、たまたま私が骨董市で入手したモスリンの長襦袢は、骨董商によると山形県内で着られており、蔵を整理した時に他の所蔵品と一緒に購入してきたものだとの話であったが、東京国立博物館の小笠原小枝先生（現・日本女子大学教授）の鑑定によると、明治期から大正期に生産されたものだと推定されるという、3種類のモスリン裂が表地に使われている。図4はこの長襦袢の胴の部分の裂を拡大したものであるが、ここに用いられているモスリンは、他の2種類のものに比べて、織り方はゆるくざっくりしており、捲縮などの羊毛本来の性質もあってか、生地に縮れが生じ、単なる平織でありながら、あたかも縮緬のような概観を呈しているのである。また、この部分の模様は、素生地に型紙を使って糊置きをしてから、地の部分を染めることによって出来た緋地白模様であり、《星》と呼ばれる型紙を合わせるための目印の点が、生地の上に等間隔に見られるのである。

したがって、唐縮緬という名称は、単なる縮緬の代用品だからとか、なんとなく縮緬のようなものだからというような消極的な理由によるだけではなく、この実物資料に見られるように、わが国に入ってきた初期のモスリンが、縮れた概観を呈していたため、そこに既存の織物の中で縮れた概観をしている縮緬との類似性を見出し、それゆえにモスリンに対して、積極的に外来の縮緬という意味をこめて、唐縮緬と名付けたのではないだろうか。

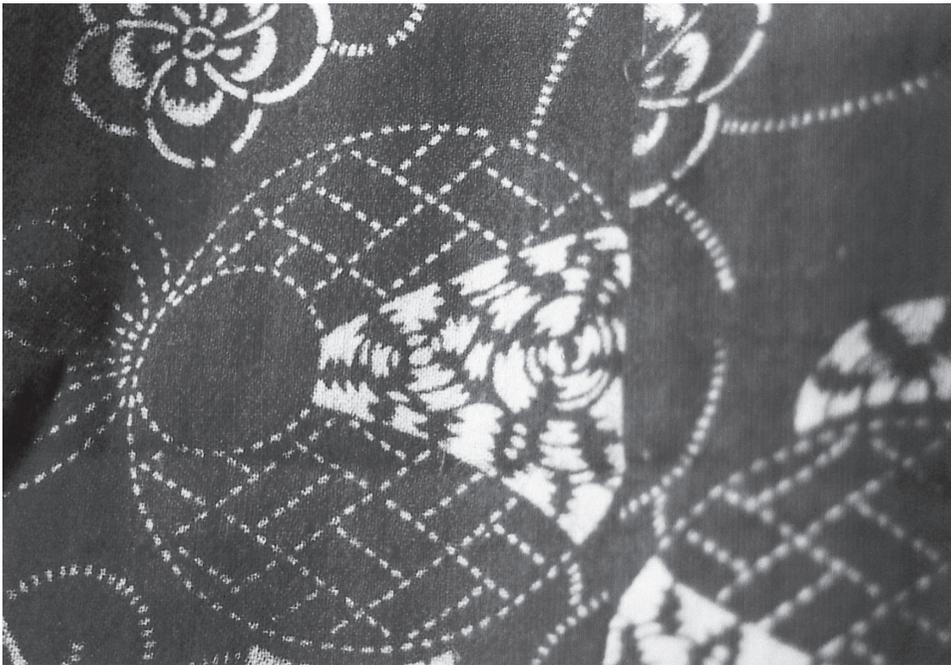


図4 モスリン長襦袢（部分）

（先川所蔵）

後のモスリンには見られないこの縮れた概観こそが、モスリンを唐縮緬と呼んだ最大の理由であると推論すると、その論拠により、以下のような事柄が容易に説明できるのである。

まず、唐縮緬という名称が、新聞・雑誌・文学作品等で、年代が下がるにつれて、徐々に見られなくなるが、このことに関しては、そのような縮れた概観を呈した初期の品がなくなっていくのにもなって、唐縮緬という名称が次第に使われなくなり、メリンスやモスリンといった名称に代わって行ったのだと、説明することが出来よう。

また、縮緬呉呂という名称についても、モスリンの登場により廃れた江戸時代以来の輸入毛織物である呉羅服連（ゴロフクレン）、通称呉呂の流れをくむ新種の毛織物で、しかも縮緬に似た外観をしていたところから付けられた名称だと解釈すれば、これがモスリンを指しているのは明白であり、詳細は次章で論じるが、『日本帝國統計年鑑』の「外国貿易」の項目の中で、途中から縮緬呉呂という名称が消えて、モスリンとなっているのも、当然のこととして納得できるのである。

Ⅲ. モスリンの数量的変遷

本章においては、『日本帝國統計年鑑』と『農商務統計表』を用いて、輸入量と国内生産量を把握することにより、近代におけるモスリンの動向を、流通量の変化という数量的な面からとらえて、年次的な変遷をたどることにより、その実態を明らかにしたいと考えている。

資料として用いた『日本帝國統計年鑑』は内閣統計院が編纂したもので、『第一回日本帝國統計年鑑』が明治15年に出されて以来、毎年出版されており、わが国のあらゆる事柄を統計的に処理して、その膨大なデータを収録したものである。そして、この中の「外国貿易」の項目に、モスリンの輸入に関するデータが収められているのである。

したがって、この『日本帝國統計年鑑』においては、モスリンの輸入量や価格など、数量化できる要素だけが取り扱われているのであって、その素材が洋装用の品なのか、和装用なのか、などといった用途の別は、もちろん明らかにされていない。そこで、そのモスリンが、実際にはどのように用いられてきたのかという具体的なことに関しては、次章以降で論じることにし、ここでは、用途の別などは一切無視して、数量的な変遷だけを見ていくことにする。

その方法としては、『第一回日本帝國統計年鑑』に登場する、もっとも古い統計年度は明治7年であるので、それ以降のモスリンに関する数値を、各々の年の『日本帝國統計年鑑』から拾い出し、まとめることとした（図5）。

それによれば、モスリンという名称が登場するのは、明治41年の『第二十七回日本帝國統計年鑑』に表れた明治40年の統計からであり、『第一回日本帝國統計年鑑』から『第二十六回日本帝國統計年鑑』までは、縮緬呉呂という名称の毛織物が輸入されている。しかし、『第二十六回日本帝國統計年鑑』までに記載された縮緬呉呂の数値のうち、明治38年と39年のものが、『第二十七回日本帝國統計年鑑』では、同じ年のモスリンの数値として記載されているのである。したがって、このことからモスリンは縮緬呉呂と呼ばれていたことが分かるのである。

モスリンが、いかなる理由で縮緬呉呂と呼ばれたのかということについては、第Ⅱ章で言及した通りであり、ここでは、公的な統計資料上で縮緬呉呂=モスリンとして扱われていたという事実の指摘のみにとどめたい。

さらに、この『日本帝國統計年鑑』のゴロフクレンの項のデータに基づけば、ゴロフクレンの輸入量は明治初期から10年代にかけて順調な伸びを示しているが、10年代半ば以降は急激に減少してしまい、20年代には貧しい人々や落ちぶれた人々の服飾素材として文学作品に登場するような流行遅れの染織品となり、大正末期には“ほんの垢擦り程度”の用途しかないとまで蔑まれているのであるが、このゴロフクレンが急激に衰退していく時期は、統計年鑑の輸入品目に「縮緬呉呂」という毛織物が登場し、急速に輸入量を増大させていくのと期を同じくしているのである。したがって、呉呂の名をその名称の一部としていたモスリンこそが、近世にわが国にもたらされて呉羅服連などと記されて以来の、わが国の毛織物としては長い歴史を持つゴロフクレンを駆逐し、それを取って代わり、さらなる発展を遂げた染織品であったということが、この統計資料からも分かるのである。

また、明治半ばまでの時期において、モスリンの輸入量は他の毛織物のセルジスやフランネル、ラシャなどに比べて、数量が1桁乃至2桁も多いのであるが、これは、モスリンが和装用の素材として用いられたために、わが国において洋装化がまだ進展していない時期から、それなりの需要があったためであると考えられる⁷⁾。

図6は前記の『日本帝國統計年鑑』に基づいたモスリンの輸入量と『農商務統計表』に基づいた国内生産量を重ね合わせた流通量のグラフである。

図5 縮緬呉呂とモスリンの輸入量

(単位：ヤード)

年	縮緬呉呂	モスリン
1874 (明治7)	4752000	
1875 (明治8)	10197000	
1876 (明治9)	10819000	
1877 (明治10)	11901000	
1878 (明治11)	13626117	
1879 (明治12)	17301218	
1880 (明治13)	20946299	
1881 (明治14)	15863192	
1882 (明治15)	8873846	
1883 (明治16)	11297560	
1884 (明治17)	14607355	
1885 (明治18)	7802765	
1886 (明治19)	7911824	
1887 (明治20)	9587308	
1888 (明治21)	16047310	
1889 (明治22)	13918284	
1890 (明治23)	19342501	
1891 (明治24)	14323531	
1892 (明治25)	18009643	
1893 (明治26)	15424139	
1894 (明治27)	19042850	
1895 (明治28)	20333183	
1896 (明治29)	37634843	
1897 (明治30)	21611820	
1898 (明治31)	21088920	
1899 (明治32)	18220344	
1900 (明治33)	25269594	
1901 (明治34)	12082420	
1902 (明治35)	13241723	
1903 (明治36)	13295134	
1904 (明治37)	6260065	
1905 (明治38)	11362567	11362567
1906 (明治39)	8926392	8926392
1907 (明治40)		5879399
1908 (明治41)		7515894
1909 (明治42)		7532561
1910 (明治43)		3364725
1911 (明治44)		3405584
1912 (大正1)		340500
1913 (大正2)		158972

各年の『日本帝國統計年鑑』より作成

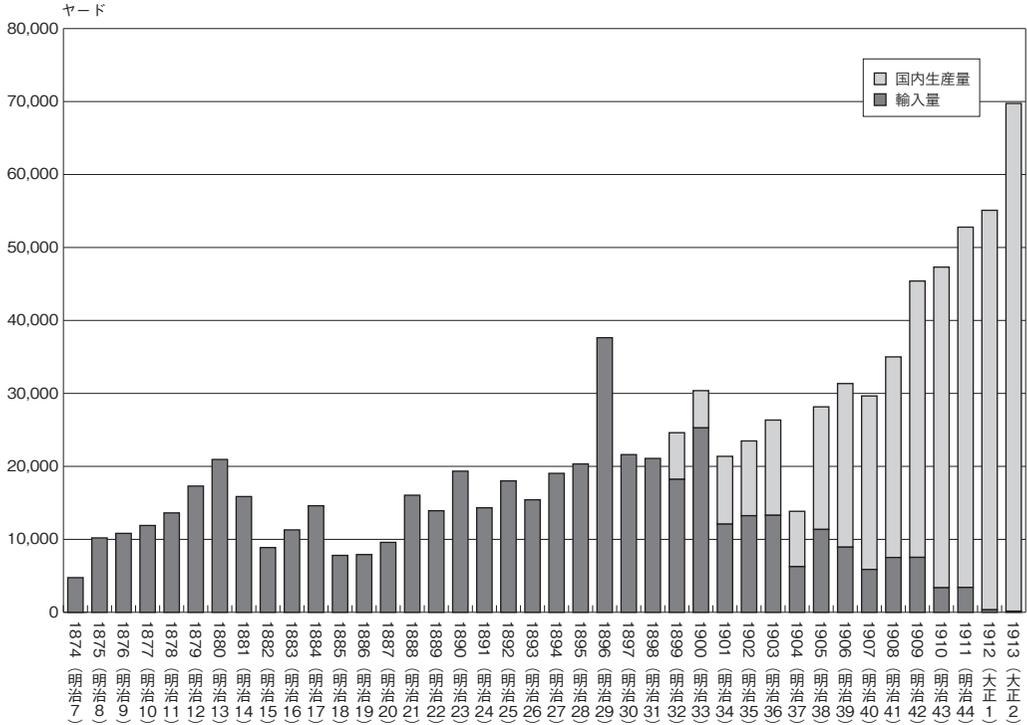


図6 モスリンの流通量（輸入量と国内生産量）

『日本帝國統計年鑑』・『農商務省統計表』から作成

このグラフを見ると、モスリンの輸入量は、年によって多少の凸凹は見られるものの、明治29年までは漸次増加し、30年代に入ると減少傾向になり、大正2年をもって、統計年鑑から姿を消しているのである。一方、国内生産量は、明治20年代末に大規模な工場が出来て生産が開始されるとすぐに増加し始め、昭和期になるまでひたすら増加し、他の毛織物の追従を許さず、ずっと独走の状態だったのである。そして、他の毛織物の生産量が停滞しつつあった時期⁸⁾でさえも、モスリンだけは唯一生産を伸ばしていたことが分かる。したがって、輸入量が年とともに徐々に減っているという事実は、モスリンの衰退を意味するのではなく、モスリンの国内生産が順調に進展していることを意味しているのである。

そして、さらには、『日本帝國統計年鑑』に海外への輸出品としても記載されるようになっていったのである。

IV. 新聞・雑誌・文学作品等に見るモスリン

わが国が世界に向かって開かれた、近代という時代において、モスリンがどのようにしてわが国に導入され、どのようにして和装素材として定着していったのかを、直接生産に携わった側や、その消費者である一般の人々の風俗の面から捉え、さらには、人々がモスリンとどのよ

うに関わり、モスリンに対してどのような思いを抱いていたかを知ることも重要なことであると考える。

そこで、この章では、当時の出来事が詳しく紹介されている染織関連の書物や、明治20年以降の『東京朝日新聞』、雑誌『風俗画報』、『明治文学全集』（筑摩書房）から見ていくことによって、その実状と変遷を明らかにしたい。

まず、モスリンの変遷に関してだが、大正15年に出版された池上正一著『モスリンと其取引』には、明治初期のモスリンについて次のような記述がある。

然るに需要者は此の呉羅服綸の緋地白模様満足せぬ趣味の向上は、……斯かる氣運に到達したわが國の情勢を見るに敏なる外國商人は、……モスリンを輸入して、……明治初年の流行界を風靡して仕舞ったのである。之れ即ち舶來モスリンはじめて輸入されたものであって、友禪縮緬の代用をなすもの、即ち唐縮緬の稱を得た所以である。當時の唐縮緬は……兎に角も捺染モスリンであった……⁹⁾

……捺染モスリンの輸入高は頗る多く、且つ無地モスリンに比してすこぶる高価であったため、……モスリンに模様法を施そうと試る者があった。即ち木村藤吉氏は之である。氏は……京都の友禪縮緬の職人で……友禪縮緬より転じてモスリンの友禪加工の研究に没頭し、……漸く不完全ながらも白地のモスリンに縮緬と同胞の友禪法を應用して加工することに成功した¹⁰⁾。

このようにして、わが国に取り入れられたモスリンだが、ヨーロッパで染色加工された輸入品の捺染モスリンは高価であるばかりでなく、絵柄が日本人の好みに合わなかったこともあって、日本から図案を送り、日本人好みの模様に染めて輸入するようなこともあった。そのうちに、生地モスリンを輸入して、国内で染色加工しようという風潮が生まれた。

そして、友禪職人だった木村藤吉や島村徳兵衛、岡崎千代造、堀川新三郎等の努力により、明治10年代の前半には、型友禪の技法を用いたモスリン友禪が誕生したのである。このモスリン友禪の誕生とその後の技法的な変遷等の詳細に関しては、今後改めて論じたいと思うが、ともかく、広幅の織物のモスリン地に友禪模様を染め付けたモスリン友禪が誕生し、ついには手染め加工の板場友禪にも見劣りしないようなモスリン友禪を、ローラー捺染機を用いた機械加工によって作り出せるようになり、大正末の最盛期へと向かっていくのである。そして、モスリン友禪の絶頂期を、昭和2年発行の『近代友禪史』では、大正12年頃だったとしている¹¹⁾。

次に、『風俗画報』のモスリンに関する記事を辿ってみたい。『風俗画報』は、明治22年2月10日号が創刊号で、はじめは月1回、途中からは月2回の発行となり、大正期まで続いた雑誌である。すなわち、この雑誌が出版されたのは、輸入モスリンをそのまま用いていた時期から、生地を輸入して国内で染色加工を施す時期を経て、原料である羊毛を輸入して生地も国内生産

へと大きく変化していった時期であり、わが国のモスリンにとって激動の時代でもあったと言える。

したがって、この雑誌のモスリンに関する記事から、明治の後半から大正期にかけてのモスリンの動向が、人々の衣生活にどのように反映していたのか、あるいは逆に、人々の側から、どのような要求や働きかけが業界に対してあったのかを知ることができる。

明治26年7月10日発行の第56号には、京都四条川原での夕涼みの際の、茶屋女の格好について、

・・・茶屋女はいづれも阿波縮白縞の単衣に黒縹子唐縮緬の短き引き上げ帯をしめ裾端からげ・・・・・・・・¹²⁾

という記事がある。ここで書いている唐縮緬とは、前章までで明らかのように、モスリンのことであるから、徳島名産のしじら織の単衣の着物用の帯としてモスリンが使われていることが分かる。

また、明治29年3月10日発行の第111号にも次のような記事がある。

・・・・前垂大流行の今日となりては・・・・甚だしきはよそ行き前垂と迄云ひ募りて全く装飾の一寸に加はれり 是等は殊に町家の娘に多しとす 随て珍らかなる柄も追々敷をまして敷奇屋唐縮緬にてほとんど普通にて賞せられず・・・・必用と装飾とを兩つながら兼ねたる前垂は實に重寶なるものなり・・・・羅紗綸子の前垂にて必竟これを伊達にして・・・・花を染めたる美しき前垂ひめりんすの裏を見せて帯の間に挿むなど最愛（いと）しきこと限りなし¹³⁾

ここからは、唐縮緬がごく一般的に用いられるようになったため、特に賞賛されるような品ではなくなったことがうかがえる。

ところで、わが国のモスリン工業のことを振り返ってみると、明治20年代後半には新聞にも図7のような毛織物製造工場の広告が登場するようになり、大型のモスリン紡績工場も創立され、生地モスリンの生産が始るのである。

したがって、モスリンの国内生産が開始され、モスリンが比較的安く手に入るようになったことが、一般的に用いられるようになった最大の原因であろう。しかも、それは帯や前垂れのような小さなものからではあるが、洋装用の小物としてではなく、最初から和装の一部分に直接用いられたのである。

そして、緋メリンスの裏地をちらりと見せて、前垂れを帯の間に挟む仕草などは、この上なく愛らしいものだとされているのであり、ここからはモスリンが全く違和感なしに一むしろ好ましいものとして—ごく一般的な女性の和装の中に取り入れられているのが分かる。

の頃からは他の毛織物とともにモスリンのことが、しばしば登場するようになる。

これらは女学生の袴の素材としてラシャとともにモスリンを用いることや、通学時の着物が華美になるのを抑制するために、縮緬などの絹織物ではなく、毛織物であるモスリンや綿織物の着用を促すものであった。

最後に文学作品の描写の中におけるモスリンの描写から、どのような人々が、どのような衣服として着ていたのかを調べ、さらに、モスリンに対する意識はどのようなものだったのかを探ってみたい。

筑摩書房の『明治文学全集』全99巻を調べた範囲では、最初にモスリンが登場するのは、明治5年の仮名垣魯文の『安愚楽鍋』における「くじらおびの あとさきばかりむらさきちりめで なかハちりめんごらうで はぎあはせたる」¹⁸⁾ という記述である。ここでは、茶店女の服装の帯についての描写の中で、異なる表地と裏地を腹合わせにした、いわゆる昼夜帯ともいわれていた帯の、さらに帯先だけが縮緬で、帯の中間部分は縮緬呉呂を用いていると書かれている。したがって、ここにおいてモスリンは縮緬呉呂と呼ばれており、あくまでも縮緬の代用品として、表からは見えない部分にのみ用いられているのである。

モスリンについて、これと同様の縮緬の代用品としての服飾描写は、明治中期から後期にかけての多くの文学作品に見出すことが出来る。その代表的なものを数点だけ取り上げてみると、坪内逍遙の『當世書生気質』（明治18年）では、女中の服装として「帯ハ赤い唐縮緬と紫縞子の腹合わせ」¹⁹⁾ と、モスリンは唐縮緬と表現されており、縞子とモスリンを腹合わせにした昼夜帯をここでは女中が締めていることが分かる。さらに、廣津柳浪の『今戸心中』（明治29年）では、落ちぶれた花魁は着物の中に「緋の唐縮緬の新しからぬ長襦袢を重ね」²⁰⁾ ているのであり、永井荷風の『薄衣』（明治32年）では、二十歳前の貧しい娘が「水浅黄の綿小柳に古代唐草を置いた唐縮緬（メレンス）の昼夜帯」²¹⁾ を占めており、小杉天外の『初すがた』（明治33年）でも、十二、三歳の娘の服装について「袖だけ縮緬の緋メリンズのお俊の長襦袢が」²²⁾ と描写されている。

さらに、田村俊子の『あきらめ』（明治44年）では、女中に次のような言葉を言わせている。

「え、唐縮緬（めりんす）ですよ。」と帯の前をなで、見せて、「縮緬のやうに見えませう。」と笑った²³⁾。

これらの例でも、帯の中でも表裏別布を合わせた昼夜帯の片面にモスリンを用いたり、古いモスリンの長襦袢や、胴抜きといって袖口や裾の見えるところだけを絹織物の縮緬を使用し、胴部や袖付け部分のような見えないところはモスリンにしてある長襦袢など、比較的貧しい女たちが縮緬の代用品的な色合いで、モスリンを帯や長襦袢に用いていることが分かる。

一方、森鷗外の『半日』（明治42年）では、大学教授である主人公の家庭内での、夫人と幼い娘の服装描写に、「茶縞銘撰の羽織を引っ掛けた奥さんが、玉ちゃんに元禄袖の友禪メリンズ

を着せて・・・」²⁴⁾とある。また、鷗外夫人の森しげの作品『あだ花』(明治43年)では、女中のいる裕福な家庭の娘が「美しい友禪メリンスの對の布團」²⁵⁾を用いている。このように裕福な家庭においても、幼い子供の日常着、布団や座布団などの身の回りの品の素材として使用されていたことが、これらの作品からもうかがい知ることができる。

また、ここで取り上げた総ての文学作品において、モスリンは唐縮緬、メリンス、メレンスと呼ばれており、モスリンという名称は見当たらないことから、モスリンという名称は人々に一般的に使用されていなかったということが明らかであろう。

V. おわりに

本来、ヨーロッパにおいてモスリンと称される染織品は、18世紀末から19世紀初頭にかけて大流行したシュミーズドレスの素材として用いられた、透けるように薄い平織の綿織物であった。

しかし、わが国においては導入当初からモスリンとは平織の薄地毛織物であった。すなわち、モスリンは呉羅服連の延長上で、縮緬呉呂という名で輸入されたのであり、日本人好みの柄のものを手に入れるために、日本から図案を送って染めてもらうようなこともしたのである。その後、国内において型友禪の技法と結びつくことによって、モスリン友禪を生み出し、ついには手染め加工の友禪にも見劣りしないほどのモスリン友禪を、捺染加工によって作り出せるようになり、大正期から昭和初期にかけて全盛期を迎えるのである。

したがって、モスリンにおいては、外来のものではあっても、最初から、和服地にふさわしい模様を施された、和装用の素材として導入されたのであり、導入後のわが国におけるモスリンの変遷は、和装用素材としてのモスリンが、いかにして従来からある和装用素材に近づき、肩を並べ、追い越していくかという行程だったと結論付けることができよう。

そして、雑誌のモスリン関連の記事や、文学作品中でのモスリンの扱われ方について年代を追ってたどっていくと、国内生産の進展により流通量が増加するのに相応して、庶民の日常着としての和服に広く使われていくのであり、文学作品においても、それらの状況はすぐに反映されていった。

しかし、それは輸入量の少ない珍奇で特別な品から、和装における普段着用の素材へと姿を変えていくことでもあり、その過程で、色合いや意匠においても、わが国に従来からある染織品の伝統を完全に取り入れ、元来のヨーロッパのものとは似ても似つかないような、すっかりわが国独特の染織品の様相を呈していったのである。

用途としては、素生地のまま、あるいは無地染・型友禪・機械捺染を施されて、縮緬の代用品としてだけでなく、毛織物の特性を生かして女性や子供の普段着の着物・羽織・長襦袢・帯、男性の兵児帯といった日常着用の和装素材として不可欠の素材となったのであり、さらには、蒲団や国旗、前垂などの小物にも用いられていた。

そして、第二次世界大戦後に、わが国の女性の洋装化が進展するまで、明治・大正・昭和と

長期にわたり、日常着用の和服の素材として、一般庶民に広く親しまれ愛用されたのである。が、洋装化の進展に伴い、普段着としての和服が廃れていく中で、真っ先に消えていくという運命を背負っていたのである。

つまり、わが国におけるモスリンの歴史こそは、流通量が少なく高価で珍奇な品であるがゆえに人々は憧れ、生産量や流通量が増加し価格も安くなると大流行するものの、その後は陳腐な品になり真っ先に捨て去ってしまうという、人間の宿命的とも言える嗜好の形態に翻弄された、顕著な例だといえるのではないだろうか。

【謝辞】

本論文で資料として用いた『日本帝国統計年鑑』は日本女子大学図書館の蔵書を、『農商務統計表』は国会図書館の蔵書を利用させていただきました。また、『東京朝日新聞』は日本女子大学図書館所蔵のマイクロフィルムを使用させていただきました。ここに心より御礼申し上げます。

【註】

- 1) 小笠原小枝：概説 異邦への憧憬—近世黎明期に請来された裂類—, 日本の染織 第四巻 舶載の染織, 中央公論社 (1983)
- 2) 池上正一：モスリンと其取引 プラトン社, 10-16 (1925)
- 3) 世界大百科事典 平凡社, 丹野郁：総合服飾史事典 雄山閣 (1979), 服飾事典 文化出版局 (1979), 田中千代：服飾事典 同文書院 など
- 4) 池上正一：前掲書, 2
- 5) モスリンと毛織—変貌する渡来布の物語—展示品, 神戸ファッション美術館, 2010.1.21-3.30
- 6) 先川直子：モスリンとスペンサー, 佐々井啓編「ファッションの歴史」 朝倉書店, 98-99
- 7) 先川直子：和装素材としての毛織物—明治期を中心に—, 服飾美学22号, 43-62 (1993)
- 8) 先川直子：和装用インパネスの普及をめぐる, 国際服飾学会誌No.18, 71 (2000)
- 9) 池上正一：前掲書, 14
- 10) 同上 13
- 11) 村上文芽著・友禅協会編：近代友禅史 芸艸堂社, 168-172 (1927)
- 12) 京都四條川原夕涼, 風俗画報第56号 (明治26年7月10日号) 東陽堂, 14 復刻版 明治文献 (1975)
- 13) 橋本花涙：前垂 (下), 同上 第110号 (明治29年3月10日号), 13-15
- 14) 宮島春齋：現時の京風俗 (下), 同上 第174号 (明治31年10月10日号), 15
- 15) 花下の春興, 同上 第232号 (明治34年5月15日号), 11
- 16) 遠藤競四郎：私立共立女子職業学校, 同上 第193号 (明治32年7月25日号), 28-29
- 17) 学習院女學部の服装規定, 同上 第369号 (明治40年8月25日号), 32
- 18) 仮名垣魯文：安愚樂鍋, (明治5年) 明治文学全集1巻 筑摩書房, 162
- 19) 坪内逍遙：當世書生氣質, (明治18年) 同上16巻, 127
- 20) 廣津柳浪：今戸心中, (明治29年) 同上19巻, 24
- 21) 永井荷風：薄衣, (明治32年) 同上73巻, 4
- 22) 小杉天外：初すがた, (明治33年) 同上65巻, 49

- 23) 田村俊子：あきらめ, (明治44年) 同上82巻, 283
- 24) 森鷗外：半日, (明治42年) 同上27巻, 35
- 25) 森しげ：あだ花, (明治43年) 同上82巻, 177